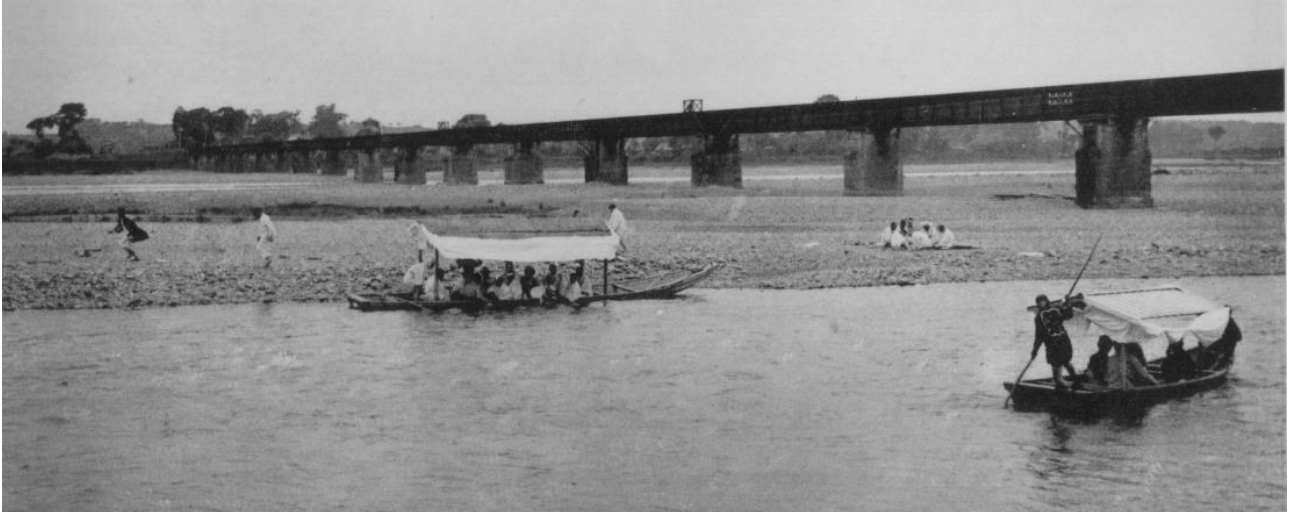


多摩川の漁法と漁具

■多摩川と生活

多摩川は、立川市の南端を東西に流れています。多摩川からは、飲料水や農業用水のほか、魚、川底の砂利などの資源も得ていました。その一方で、洪水などの災害に見舞われることもあり、昔から人々の生活と深く関わってきました。



料亭の屋形船(明治30年代) 明治時代、立川近辺には鮎料理の料亭が3軒ありました。客は、川原の小屋や屋形船の上で、鮎料理に舌鼓を打ちました。



■多摩川の伝統漁法

多摩川では、さまざまな漁法が行われてきました。釣り、網や笊を用いるもの、鶺鴒など100種類を超えるといわれています。いずれの漁法も、川の状況と魚の習性を巧みに利用したものでした。

左：多摩川の鶺鴒（昭和初期）

多摩川の鶺鴒は、江戸時代にはすでに行われていました。

昼間に徒歩で行う徒歩鶺鴒という方法で、かがり火をたいて夜に行う長良川などで行われている方法とは異なっていました。明治時代になると、料亭の屋形船の前で一種のショーとしても行われていました。

■伝統的な漁法



友釣り

対象は鮎。

釣り糸につけたおとり鮎を流れに送り出します。鮎は自分の縄張りに入って来たおとり鮎を追い出そうとして鉤に掛かります。



はね網

対象は主に鮎。

おどし具を持つおどし手と、はね網を持つ受け手が川を下ります。驚いてはね上がった鮎を後方の受け手がはね網で受け、鮎を捕らえます。



瀬張

対象は主に鮎。

稲わらで作った「おかざり」を川幅いっぱい張り、おどろいた鮎は仕切り網の方へ逃げ、「もじ」の中に入ります。

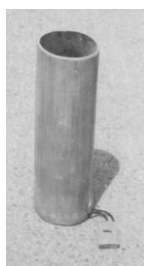


寄せ網

対象は川魚全般。

寄せ手がシラタを引っ張り、魚を追い寄せます。魚はシラタの網の白さと重りの音に驚いて逃げ、雑魚笥に逃げ込みます。

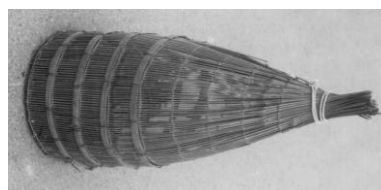
■さまざまな漁具



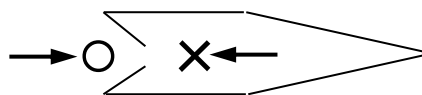
通い筒



おとり箱



雑魚笥



雑魚笥の断面図。入り口は広いが、中に返しがついており、いったん中に入ると出られません。

通い筒とおとり箱は友釣りのための道具で、通い筒は、糸のついた状態のおとり鮎を入れるためのものです。

おとり箱は、おとり鮎を入れておくための生簀です。なるべく鮎を元気に生かしておくため、川の流に浸しておきます。



箱めがね

木でできた箱形の前面にガラスがついています。水中をのぞいて魚を探したり、川底の状態を確認したりします。